

漢語資料としての詩学書

『詩語碎金』を例として

ここで「詩学書」と呼んでいるのは、中野三敏先生（一九八一）の呼び方に従っているのだが、中野先生は江戸期の呼び方によっている）、これは、樋口元巳氏（一九八〇）が「漢詩作法書」と呼び、村上雅孝氏（一九九六）が「作詩参考書」と呼び、山田忠雄氏（一九五九・一九八一）が「詩語碎金の如き作詩書の類」と呼んでいるものとはほぼ重なると思われる。詩学書にはさまざまな形式があるが、ここでは詩語を集めたものを対象として、これを語彙史の資料として扱うことを考えたいと思う。

詩学書を語彙史の資料として扱ったものとしては、樋口元巳氏などのように訳語の方を口語資料としたものがある。漢籍国字解の類を口語資料とするものと通ずる扱い方と言える。これを本稿では、漢語資料として扱うことを考える。訳語の方ではなく、項目の方を取り上げるのである。

しかし、これら詩学書に載せられている項目がそもそも

「漢語」なのか、あるいは「国語の中に於ける漢語」なのかという問題がある。

現在、「漢語」というと、音読する字音語のことを指すが普通であるが、かつてはそれとは違う捉え方もあったようである。例えば、中国由来のものであれば、訓読していても「漢語」と呼ぶことがある。『日本国語大辞典』の「漢語」の項にも引くように、夏目漱石『三四郎』の例「灯火親しむべしなどといふ漢語」もそうである。

また、明治期のいわゆる漢語辞書が、漢語と書名にしながらも、音読の語ばかりではなく、訓読の項目をもあげることがあるのは、漢語という語が字音語のみをあらわしていたのではないことを示すものである。

いま、漢和辞典を引くと、国語辞典では立項されない、句とでも云うようなもので慣用句と言うには短いもの（『大漢和辞典』の凡例で「成句」と呼んでいるのはこれらや慣用

句も含めていたのであろう)が載せられていたりする。たとえば、『大漢和辞典』には「執中」という項目があるが(小型漢和辞典の『新字源』には「執中ちゅうをとる」で載せている)、これは『日本国語大辞典』では「しつちゅう」「しゅうちゅう」「ちゅうをとる」を引いても載せていない。「執中法」という項目はあるのだが「執中」はなく、「なかをとる」という項目はあっても「執中」という漢語には触れていないのである。

逆に「帰藩(きはん)」という語は、『日本国語大辞典』にはあるのに、『大漢和辞典』などにはみられない。『佩文韻府』には『後漢書』の用例がとられているのである^{〔注2〕}。

このように、漢和辞典類と国語辞典類では項目として立てるものが異なっているのだが、これらを総合したものととして、『日本漢語大辞典』というようなもの(『日本・漢和大辞典』)という題名ではあまりにも奇妙であろうか)があればよいと思っている。漢和辞典は、中国の古文を読むためと、日本の漢字の意味を知るための両方の役割を持つ、鶴のようなものだと言われるが、これを徹底的に日本の漢字のための辞典としたものが欲しいのである。日本の漢字の使い方を知るためには、中国での漢字の用法も必要であるのだが、それは過去の日本人の目を通した用例を用いるのである。上に挙げたような成句も、日本人が成句ととらえたものを取り上げるのである。

こうしたものを編む際、詩学書のようなものも、その編纂のため

の材料になるのではないかと思っている。

詩学書が、字音語の資料ではないとしても、また「国語の中の漢語」ではないとしても、日本人が漢語であると認識したものとして、詩学書に見える語句を扱うのである。

また、明治期に翻訳語を作り出す際に、漢学の素養があったから漢語を充てる事が可能であった、とよくいわれる。素養としての漢学はどのようなものであったのか、ということを探る資料にもなりうるのではないかと思う。漢学というと、普通は経学であり、作詩はその余技とでもいうべきものであろう。しかし余技とはいえ多くの漢学者が詩作もしている。その詩作のための参考書である詩学書を見てゆくと、「漢学の素養」の一端がわかるのではないだろうか。

また、近世の漢語ということを考えるときに、和漢混淆の文を見るだけでなく、漢文をも見たほうがよいのではないかと考えられる。従来、語彙史の資料として来たものは、近世期に限らず、漢文資料が少なかったと思われる。学術用語などでは漢文資料の利用も多くなって来ているが、一般的な語彙についてはまだ十分であるとはいえない。

漢文資料を漢語の資料として扱うには、中田祝夫氏(一九五二)が提唱し、柏谷嘉弘氏(一九八七など)が平安時代の訓点本について調査したように、音読符の付いたものを拾い上げる、という作業を、江戸時代の漢詩文の訓点についても行うことが考えられるが、その前に、こうした詩学書の

類の漢語を整理しておくのもよいのではないか。詩を作ろうとする人はこのような詩学書で語彙を豊富にしていたわけであろうから、素養といえる部分を押さえるためにこの詩学書の語彙を整理し、その後、江戸時代から明治時代にかけての豊富な漢文資料に立ち向かう、という筋道を考えるのである。

また原作品では読みなどが不明のものもあるが、こうした詩学書をもとに同時代の読みを確認しうることがあるわけ、また、読み仮名、訓点などで、単なる漢字連続か字音語か、ある程度判断可能ということもある^{注3)}。

また、読み仮名のある詩学書によれば、漢音と呉音の使用状況についてみることもできる。明治期以降、それ以前に比べて漢音が優勢になってゆくといわれるが、江戸時代において漢詩における漢語の読み方はどうであったのか、ということとを調べる事が出来るのである。

語学資料としての詩学書にはもちろん欠点もある。まず、他の辞書類と同様、文脈が無い、ということがある。語釈が記してある本もあるのは他の多くの辞書類に比べて強みではあるが、語釈といっても、山田忠雄氏の指摘のように、字に即した解釈であることが多いし、ある特定の詩題での用い方を示しているようである。特定の詩題での用い方を示しているのに文脈が無いというのは大きな欠点であり、実際の漢詩から用例を探すが望まれることになる。

他の欠点として、採録されているのが詩語である、ということもある。詩にはあまり抽象的なことは詠まれがたいことなどもあるし、すこし偏った用語集といえよう。これを補うには、『文藻行潦』『文語碎金』といった文語集など、詩学書の周辺の分野のものも参考にした方がよいであろう。ただ、『文語碎金』などになると、熟字集というよりも、文例集のようなものとなっているので、やや扱いにくい感がある。

さて、本稿では詩学書のうちで最も流布したと思われる『詩語碎金』を見ることにする。『詩語碎金』は、安永五年、延岡藩主内藤政陽の序を有し、序などによれば政陽が泉要士徳らに編纂させたものである。題名、内容ともに似ている『詩語碎錦』(永田俊平、明和四年序)よりも遅れるが、振り仮名が施してあるので読みが確定しやすく、語彙資料としては扱いやすいし、広く流布していると思われるので、こちらを資料とする。

先述のように、訓読のものも「漢語」として扱いたいのであるが、辞典類を使うことによって、過去のものと比較することが比較的容易である字音語を中心とした調査になった。また『日本国語大辞典』に項目として見えるものの調査が中心となったが、これも他の資料との比較がやりやすいうようにということである。

まず『詩語碎金』の項目の中から、『日本国語大辞典』に立項されているもので、日本での用例が明治以降のものしかないものを掲げる。

一望	陰伏	屋後	屋背	海色	海樓	夏雲	佳宴
客心	官道	帰期	帰途	帰藩	救治	急湍	暁鴉
旭日	群童	輕雲	輕烟	輕舸	鷄声	月夜	絃月
苦寒	苦熱	香餌	荒草	江波	豪遊	国手	湖山
坐間	残礎	残樽	紫氣	舟人	愁容	酒壺	蛛糸
珠杯	春禽	春昼	時様	小雨	蒸氣	松菊	小亭
書架	新墳	醉態	垂釣	水程	青鞋	性僻	石榻
泉流	竈烟	双燕	鐸声	断崖	朝暉	鳥語	天壇
登高	波間	霸囟	波面	悲秋	病客	氷桂	宝匣
墓門	奔雷	麻衣	密樹	野禽	幽韻	友情	楊花
来尋	落木	乱鴉	離歌	籬下	柳陰	林影	隣翁
冷艷	連朝	論文					

これは『日本国語大辞典』によって示したのであって、この中にそれよりも古い用例を見出すことが出来る語はある。例えば「泉流」は『延慶本平家物語』にあるし、「舟人」は『太平記』に音読したと思われるものがある。また、日本漢文を含めれば古い用例をもつ語が多くある。「苦寒」「登高」「籬下」「垂釣」などは、音読したことが確かなものとして明治以

降のものを挙げていたのであるが、この熟字自体は古くから使われているものである。「屋後」「籬下」は都賀庭鐘『莠句冊』、「屋背」「官道」「帰藩」「鳥語」「病客」「野禽」は『南総里美八犬伝』、「帰途」は『近世説美少年録』に見える。他にも「国手」が明治の用例しかないというのは、『日本国語大辞典』の日本漢文からの用例の乏しさを感じさせるところである。

これらの語について漢籍での使用状況を見ると、『日本国語大辞典』、『大漢和辞典』、『漢語大詞典』、『佩文韻府』を見ても、漢籍での用例が見つからないものに「友情」がある。秋部の【秋日訪友人村亭】の詩題のもとに「友情」ユウジヤウトモダチコ、ロイレ」とあるものである。この語は、『漢語大詞典』では巴金「神鬼人」という新しい例をあげて、「何況在東京還有 們的友情来温暖我的心！」というのは日本での使用を思わせるものである。漢籍での古い用例がみられない。

他の多くの項目が漢籍での用例を持つことから考えると、この「友情」も和製漢語というわけではなく、おそらく漢籍の用例があるのではないかと思うが、見出せないのである。たとえばインターネットで台湾の中央研究院の「人文資料庫師生版」を検索してみると、『続高僧伝』の一件（巻二十一第八、『大正新修大藏經』五十卷六一〇頁）が見つ

るのであるが、これは「布衣知友、情款綢狎」である。他を探してみても、「朋情」や、字体が似ていて意味も通じる「交情」は見えるのであるが、これは平仄がことなり、「交情」の誤写などで「友情」が生じたという筋道は考えがたい。

日本での用例としては、佐藤亨『幕末・明治初期語彙の研究』によれば、箕作阮甫『玉石志林』（安政二年以降）に見えるという。電子ブック『ことわざ名言の泉』（小学館 一九九〇）の「一日見ず、三月の如し」の項によれば、高杉晋作の、桂小五郎宛、文久二年九月十八日付の書簡に見えるという。

また、岡鹿門『在臆話記』第三集卷十一（『随筆百花苑』巻二、七四頁）に、「其友情、至レリ尽セリ」とあり、文久元年十一月十四日の記事であるが、これは明治四十年以降の筆録になるものである。

付記

「来尋」という語も、辞典類では漢籍での用例を見出しにくい。『日本国語大辞典』で、同じ項目としている「来訊」なら『大漢和辞典』でも見出せるのであるが、「尋」は平声侵韻、「訊」は去声震韻で異なる音である。『佩文韻府』でも見出せないが、杜甫「無家別」に、「歸来尋旧蹊」とある。しかしこれは「来」と「尋」の間に切れ目が有り、熟語とはなっていない。

しかし宋代になれば、陸游「登賞心亭」に「半醉来尋白鷺洲」とあるし、梅堯臣の詩にも、「来尋淮上寺」（「施景仁邀詠泗州普照王寺古松」）、「来尋觀魚臺」（「濠梁感懷」）、「偶来尋

隱居」（「訪石子澗外兄林亭」）、「来尋谷口春」（「和師直早春雪後五壟道中作」）、「来尋鳥爪人」（「送潘士方建昌」）と見える。また白話小説では『清平山堂話本』にも「我來尋」などと見えるようである。

日本での用例としては、藤井竹外『竹外二十八字詩』後編巻上冒頭の「永源寺觀楓三首」第一首にも「暮鐘引客此来尋」と見え、これは「心・尋・深」と侵韻で押韻して用いられている。こうして見ると、この「来尋」が辞書に載せられないのは不思議である。

「佳宴・残礎・珠杯・鐸声・籬下」も、辞典類では漢籍の用例が探し出せない。「鐸声」は陸游の「月夕」に「簷迴送鐸声」、「晨起」に「榻上鐸声悲破夢」と見える。「籬下」は、陶淵明「飲酒二十首」の「採菊東籬下」では、辞典類にはとられないのだから、梅堯臣「和江隣幾有菊無酒」の「当時陶淵明、籬下望亦久」などによれば、辞典類に採録してもよいのではないかと思える。陸游の詩にも見える。

なお、これらの語の『日本国語大辞典』における明治以降の用例というのは、『花柳春話』であるものが多いのだが（屋後・佳宴・帰途・曉鴉・江波・湖山・舟人・愁容・時様・双燕・友情・来尋・柳陰・連朝）、これは『花柳春話』が漢文訓読的な漢語を多く含むものであるという米川明彦氏（一九八五）の指摘を思い起こさせる。これらの語が『詩語碎金』に見えるということは、これらの語は明治以降に

漢籍から取り入れられて使われたというものではなく、江戸時代のうちに漢詩の世界では使われていた（あるいは使った）とが出来るようになっていた」ということである。

次に『日本国語大辞典』において、日本での用例のないものをあげる。

雲臥	園木	花塢	家醞	旱雲	寒空	暁光	凝脂
郷天	暁色	玉杖	金液	吟情	景勝	戸庭	故里
菜畦	山閣	山窓	山風	山木	秋懷	秋宵	蒸暑
小艇	傷悼	場圃	紗巾	酒卮	酒味	醇醪	新陽
水雲	醉舞	垂楊	盛筵	征騎	濟勝	清賞	石壇
蝉吟	浅水	浅瀨	霜夜	祖帳	黛眉	丹砂	短艇
短籬	昼眠	釣鉤	菝蘆	道衣	薄雲	瀑声	晚照
別筵	別酒	芳景	野菊	野色	幽泉	落帽	凉雨
綸巾	林麓	冷雨	弄瓦				

たとえば、「暁光」が『和漢朗詠集』の菅原道真の詩句に、「暁色」が同じく源順の詩句に見えることなど、音読したことがたしかなもののみを用例としている『日本国語大辞典』によっていることによる問題点があるのは、先程と同様である。「釣鉤」は『日本書紀』巻二に見えるが、普通「ち」と訓読されているので字音語の例とはされないのである。また「景

勝」「別酒」が都賀庭鐘『英草紙』に見えることなど、近世期の用例を見ることが出来るものもある。

また、これらの中には、「寒空」「山風」など、訓読すればそれに対応する和語が有って、そのことにより、字音語としての用例であるかどうか明らかではないために、用例として取られていないものもあるであろう。

これらの語の漢籍での用例は、『大漢和辞典』『漢語大詞典』でおおむね見出すことが出来た。「瀑声」は見出しがたいが、これは陸游「七月十九日大風雨雷電」に「尚聽飛濤濺瀑声」とある。

これらの他に、『日本国語大辞典』で、日本での用例に近世の漢詩文を掲げるものもみられた。

客衣	豪華	科頭	沙汀	山径	残照	残碑	村叟
楔事	山鬼	山溪……					

といったところである。これらは、漢文脈では使われていても、和漢混淆文などで使われていなかっただけ、ということのようである。先に掲げたような、『詩語碎金』に見えていて近世までの用例が見出せない語彙についても、これらの近世漢詩文のみの用例を持つ語彙と、同じような性格の語彙であると考えることが出来るであろう。

以上、『詩語碎金』における項目語を見て来たが、もちろん、これらの他にも多くの語がある。各時代を通じて盛んに使われているものもあれば、『日本国語大辞典』で立項されないようなものもある。本来はそのようなものも含めた全てを、『詩語碎金』の漢語、として論ずるべきなのであるが、ここでは、時代的に見て、それ以前にあまり使われていないように見えるものについてのみ取り上げた。

おわりに

中野先生の「蔵書目その八 詩学書」で、詩学書の存在を知り、これを語彙史の資料、とくに漢語史の資料として使いたいと思ひ、集めるようにしてきたが、これを実際に語彙史の資料として扱うのはなかなか難しいことである。まずは、個々の詩学書の索引のようなものを作っていく、総合索引をめざしてゆけば、語彙史研究の資料になるだろうと思っている。

詩学書といってもさまざまである。波多野太郎氏（一九八〇）に収められている山本北山の『詩用虚字』や、それを大きく増補したものであると思われる澤熊山の『詩語群玉』は、中国の詩の用例をあげて俗語的な語までも採録している。また、明治期の詩学書になると、新しい事物を読み込もうとして新漢語のようなものも採録している。明治期に盛んに出さ

れる漢語辞書の類との相互の影響関係も考えねばならないし、作文用語集への影響もありそうである。こうしたことを考えつつ、詩学書を見てゆきたいと思っている。

注1 松井利彦氏（一九九〇）一八五頁など参照

注2 『佩文韻府』は、漢和辞典類に比べると項目となる規準がゆるいようで、たとえば冒頭の「東」のところをみても、「渤海の東」といったようなものまでみられる。これは詩作のための用例集といった性格から来るものであろう。『駢字類編』ではまた違ってくる。

注3 ただし、訓読にとられないことも必要であろう。たとえば岡崎元軌『日本詩礎』などにおいて、「最高峰」という語は「最も高き峰」と訓読するような返り点がみられるが、現在では音読される字音語となっている（『日本国語大辞典』では音読の用例として徳富蘆花「思ひ出の記」を掲げる）。こうしたものが音読されるようになるのが時代的なものなのか文体によるもののかは考えねばならないが、字音語の源流としてこのような成句があることは指摘しておかねばならないことである。

参考文献

- 柏谷嘉弘（一九八七）『日本漢語の系譜』東苑社
中田祝夫（一九五二）『国語史上の問題 漢語の源流について』『国語』復刊二号（『古点本の国語学的研究 総論篇』第五篇第三部一）
中野三敏（一九八一）『蔵書目その八 詩学書』『文献探究』八

波多野太郎(一九五四・五五)中国小説戯曲の用語研究ノート

(一)(二)『日本大学文学部研究年報』四・五

波多野太郎(一九八〇)『白話虚詞研究資料叢刊』龍溪書舎

樋口元巳(一九八〇)江戸時代の啓蒙的漢詩作法書『神戸商船大学

紀要文科論集』二九

松井利彦(一九九〇)『近代漢語辞書の成立と展開』笠間書院

松井利彦(一九九七)明治期漢語辞書の諸相『明治期漢語辞書大系

別巻三』大空社

村上雅孝(一九九六)作詩参考書『漢字百科事典』明治書院

山田忠雄(一九五九)漢和辞典の成立『国語学』三九

山田忠雄(一九八一)『近代国語辞書の歩み』三省堂、第二部第二

章『漢語辞書の盛行』

米川明彦(一九八五)『欧州奇事』花柳春話』の漢語『国語学』一四

○

本稿は、第五九回国語語彙史研究会(一九九八・九・二六 於奈良教育大学)での発表の一部をもとにしている。同会において貴重なご意見を下さった方々に感謝申し上げます。

陸游・梅堯臣の詩の検索には、小田美和子氏の作成されたテキストファイルを、『清平山堂話本』の検索には、勝山稔氏の制作されたテキストファイルを利用した。また、本邦用例の検索については、情報処理語学文学研究会のテキストデータを利用した他、佐藤貴裕氏の協力を得た。記して感謝申し上げます。

なお、『詩語碎金』などのテキストデータを、ウェブページ上で公開している。現在のURLは、<http://kuzan.f-educ.fukui-u.ac.jp/goi.htm>である。

(校正時付記)その後「友情」を探していたが、後藤章雄氏『日本詩紀』拾遺(九)〔大阪大学教養部研究集録42〕によって、源為憲「題法華詩・五百弟子品」(法華經開題)に「醒後初知親友情」という句のあるのを知った。「親友の情」ではあるが、「友情」に近い表現である。

(電子版付記)この電子版は、雑誌の体裁になるべく近づけてPDF化したものです。頁などはおおむねあわせておりますが、改行等は違っております。

なお、「友情」という語は、本稿執筆後に公開されたインターネット上の「全唐詩」検索で見いだすことができました。以下の詩に見えるものです。

歐陽詹「有所恨二章 並序」

韋應物「自尚書郎出為 州刺史」